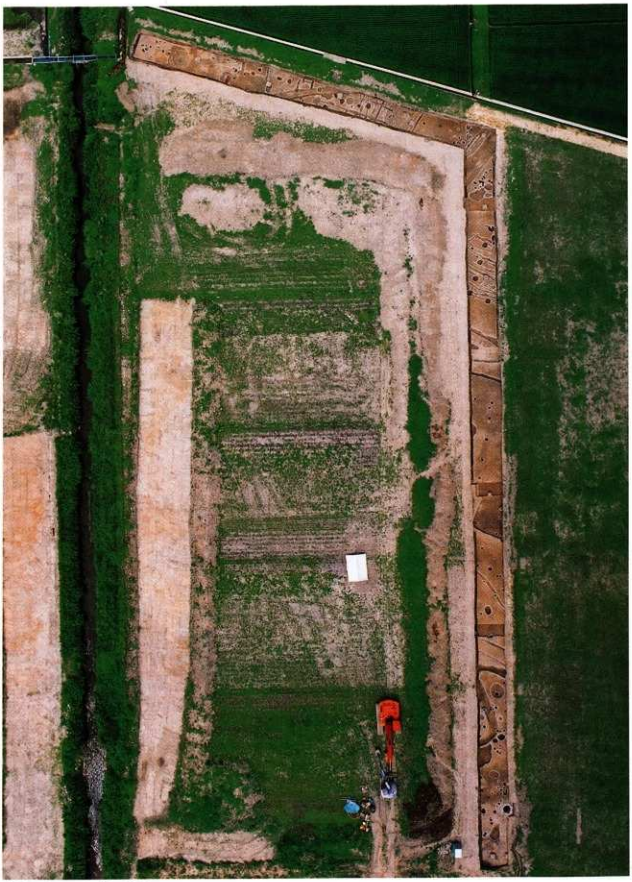
県営ほ場整備事業（婦中南部地区）に係る
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書

# 富山県 婦中町

# 南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ

2000年3月

婦中町教育委員会



**巻首図版1　調査区全景**

巻首図版２　１．SI01出土土器　２．SI01出土状況（西から）

# 序

婦中町は、西部を呉羽丘陵、東部を神通川・井田川に育まれた水田地帯の広がる自然に恵まれた町であります。町西部の呉羽丘陵周辺は古くから県内でも屈指の遺跡の宝庫であることは知られており、町東部の水田地帯にも最近の県営公害防除特別土地改良事業等に先立つ調査で多くの遺跡が確認されています。

本書で報告する南部Ⅰ遺跡は平成6年度に発見された遺跡で、今年度は県営ほ場整備事業（婦中南部地区）に伴う六ヶ用水改修工事に先立ち調査致しました。

発掘調査では奈良・平安時代、中世の遺構・遺物をはじめ古墳時代前期の竪穴住居跡等が検出され、長い期間にわたって人々の生活が井田川左岸流域に営まれていたことが確認できました。特に古墳時代前期の竪穴住居跡はほぼ同時期に築造されたと考えられている国指定史跡王塚古墳との関係が示唆され、今後の調査に大変興味が湧き、大きな期待を寄せるところです。また、竪穴住居跡出土土器は富山県における当該期の標準資料といえ、貴重な資料といえます。

本書はこうした埋蔵文化財調査の成果をまとめたものであり、今後の調査研究を進める上で参考にして頂きますとともに埋蔵文化財ご理解の資料としてご活用頂ければ幸いと思います。

終わりに、調査に多大なご協力いただきました地権者並びに地元の方々はじめ、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成12年3月

婦中町教育委員会
教育長　宮　島　信　一

# 例　言

1　本書は、富山県婦負郡婦中町島田地内に所在する南部Ⅰ遺跡の発掘調査報告である。

2　発掘調査は県営は場整備事業（婦中南部地区）に伴う六ヶ用水改修工事に先立ち、富山県農地林務富山農地林務事務所の依頼を受け婦中町教育委員会が実施した。調査費用の地元農家負担金は婦中町教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。

3　調査期間・面積は以下の通りである。

調査期間　平成11年5月12日～平成11年7月28日（延べ50日）

調査面積　637㎡（延べ950㎡）

4　調査体制は以下の通りである。

調査担当者　婦中町教育委員会　生涯学習課　文化財保護主事　堀内　大介
嘱　　託　小島あずさ
嘱　　託　野原　大輔

調査事務局　婦中町教育委員会　生涯学習課　課　　長　見波　重尋
文化振興係長　山田　茂信

作業員の確保は婦中町シルバー人材センター、仮設事務所敷地・仮設水道借上げは渋谷孝治氏、表土掘削は吉田建設工業株式会社、座標軸の設定・空中撮影・井戸の測量については株式会社日本テクニカルセンターの協力を得た。記して謝意を表したい。

5　資料の整理、本書の編集と執筆は、調査担当者がこれに当たった。文責は堀内にある。

6　現地調査・資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略、50音順）

赤沢徳明・金三津英則・久々忠義・高橋浩二・三島道子・宮本哲郎

また、遺物写真撮影については、場所・器材等城端町教育委員会の御協力を得た。大平奈央子氏・宮崎順一郎氏には記して厚く感謝申し上げる。

7　本書の挿図・写真図版の表示方法は次の通りである。

(1)　方位は真北、水平基準は海抜高である。

(2)　遺構の表記は次の記号を用いた。

竪穴住居：ＳＩ　掘立柱建物：ＳＢ　溝：ＳＤ　土坑：ＳＫ　柱穴：ＳＰ　井戸：ＳＥ

不明遺構：ＳＸ

8　出土遺物および記録資料は婦中町教育委員会が保管している。

9　整理期間中の参加者は次の通りである。

小島あずさ・野原大輔（嘱託職員）

生田寿美子・村上千春（整理作業員）

# 本 文 目 次


巻首図版
序　文
例　言
目　次
Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の経緯と経過……3
　1．調査に至る経緯……3
　2．調査の方法……3
　3．座標軸の設定……3
Ⅲ　調査の概要……4
　1．基本層序……4
　2．遺構……4
　3．遺物……17
　4．考察……29
Ⅳ　まとめ……30
参考文献
写真図版
報告書抄録


# 挿 図 目 次


第1図　遺跡分布図
第2図　調査対象範囲と区割図
第3図　基本層序模式図
第4図　遺構図
第5図　上層遺構配置図（1）及び西壁断面図
第6図　上層遺構配置図（2）及び南壁断面図
第7図　下層遺構配置図
第8図　ＳＩ01・ＳＫ08遺物出土状況及び断面図
第9図　ＳＩ02周辺及びＳＫ40・ＳＢ03平・断面図
第10図　ＳＤ33・ＳＸ01周辺平・断面図
第11図　ＳＸ02・03周辺平・断面図
第12図　ＳＢ01・02
第13図　ＳＥ01・ＳＤ02周辺平・断面図
第14図　遺物実測図（1）
第15図　遺物実測図（2）
第16図　遺物実測図（3）
第17図　遺物実測図（4）
第18図　遺物実測図（5）
第19図　遺物実測図（6）
第20図　遺物実測図（7）
第21図　遺物実測図（8）
第22図　遺物実測図（9）
第23図　試掘調査出土遺物実測図

表1　遺跡一覧表
表2　主軸方向一覧表

# Ⅰ　遺跡の位置と環境

婦中町は富山県の中央部に位置し、地形は県中央を南北に縦断する呉羽丘陵の南に連なる西側の丘陵部及び、神通川とその支流である井田川によって形成された扇状地である東側の平野部に二分される。本書で報告する南部Ⅰ遺跡は、井田川左岸扇状地の、井田川と峠川に挟まれた微高地上に立地し、婦中町熊野道・島田・高田附地内に広がる弥生時代末期から近世に至る複合遺跡である。遺跡の現況は水田・畑地である。

本遺跡の周辺には、西側の丘陵地帯を中心に数多くの遺跡が存在している。縄文時代の遺跡は中期の集落跡である鏡坂Ⅰ遺跡がある。弥生時代の遺跡としては中期の千里C遺跡、末期の集落跡である千坊山遺跡・鍛冶町遺跡・離山砦遺跡があり、集落の墓地と考えられる六治古塚・向野塚・鏡坂墳墓群・富崎墳墓群（富崎城遺跡内）がある。六治古塚・富崎1号墓は試掘調査により四隅突出型墳丘墓であると報告されている〔片岡1999・久々1991〕。古墳時代の遺跡は王塚古墳（国指定）・勅使塚古墳（県指定）・富崎千里古墳群がある。古代の遺跡は、集落跡である新町Ⅱ遺跡・下邑東遺跡がある。中世の遺跡としては集落跡である千里E遺跡・小倉中稲遺跡があり、神保氏の居城であった富崎城を中心とした富崎城塁群がある。

本遺跡は県営ほ場整備事業に先立ち平成6年度から平成9年度に分布調査、平成7年度から平成11年度に試掘調査が行われている。平成9年度には個人住宅建築に係る本調査が行われ、弥生時代終末期（月影Ⅱ式）の竪穴住居跡と古墳時代初期（古府クルビ式）の溝（1998年度報告では白江式期の溝としたが改める。）が検出されている〔堀内1998〕。

**表1　遺跡一覧表**

| No. | 遺跡名称 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名称 | 種別 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 南部Ⅰ遺跡 | 集落跡 | 弥生（後期）～古墳（前期）・古代（奈良・平安）・中世・近世 | 29 | 鏡坂Ⅱ遺跡 | 集落跡 | 縄文（中期） |
| 2 | 南部Ⅱ遺跡 | 集落跡 | 中世 | 30 | 鏡坂Ⅲ遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 3 | 上吉川Ⅰ遺跡 | 集落跡 | 古墳（初期）・古代・中世 | 31 | 鏡坂介西塚 | 小世墓？ | 中世？ |
| 4 | 小倉中稲遺跡 | 集落跡 | 古代（平安）・中世 | 32 | 千坊山遺跡 | 集落跡・城館跡 塚状遺構・散布地 | 旧石器・縄文・弥生（末期）・古代・中世（鎌倉・室町） |
| 5 | 小倉中稲Ⅱ遺跡 | 集落跡 | 中世 | 33 | 六治古塚 | 四隅突出型墳丘墓 | 弥生（末期） |
| 6 | 千里E遺跡 | 集落跡 | 中世・近世 | 34 | 向野塚 | 方形墳丘墓 | 弥生（末期） |
| 7 | 千里D遺跡 | 散布地 | 古代・中世・近世 | 35 | 古里保護園前遺跡 | 散布地 | 縄文・弥生 |
| 8 | 千里B遺跡 | 散布地 | 古代・中世・近世 | 36 | 家老屋敷城跡 | 山城 | 中世 |
| 9 | 千里C遺跡 | 集落跡 | 弥生（中期）・古代 | 37 | 五つ塚 | 古墳？ | 古墳？ |
| 10 | 千里F遺跡 | 散布地 | 古代 | 38 | 勅使塚古墳 | 古墳 | 古墳（前期） |
| 11 | 大舘城跡 | 城館 | 中世 | 39 | 王塚古墳 | 古墳 | 古墳（前期） |
| 12 | 猿ヶ馬場城跡 | 山城 | 中世 | 40 | 王塚古墳北遺跡 | 散布地 | 縄文 |
| 13 | 富崎千里古墳群 | 古墳 | 古墳 | 41 | 羽根北遺跡 | 散布地 | 不明 |
| 14 | 千里片坂遺跡 | 散布地 | 不明 | 42 | 新町Ⅱ遺跡 | 集落跡 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 15 | ゴダイ塚 | その他 | 中世 | 43 | 新町横穴墓 | 横穴 | 古墳？ |
| 16 | 義田山砦 | 山城 | 中世 | 44 | 各願寺前遺跡 | 集落跡・散布地 | 縄文・古代・中世(戦国) |
| 17 | 下瀬向山遺跡 | 散布地 | 不明 | 45 | 恋ノ山古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 18 | 離山砦遺跡 | 集落跡・山城 | 弥生（末期）・中世 | 46 | 新町大塚古墳 | 中世墓？ | 中世？ |
| 19 | 富崎赤坂遺跡 | 散布地 | 弥生・中世 | 47 | 新町Ⅲ遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 20 | 富崎南野遺跡 | 散布地 | 縄文・古代・中世 | 48 | 新町Ⅰ遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 21 | 富崎城西遺跡 | 散布地 | 縄文 | 49 | 二本榎Ⅱ遺跡 | 散布地 | 縄文・古代（奈良）・近世 |
| 22 | 富崎城遺跡（富崎墳墓群含む） | 散布地・山城 四隅突出型墳丘墓 方形墳丘墓 | 縄文・弥生（末期）・中世 | 50 | 新開遺跡 | 集落跡・品塚？ | 縄文・中世？ |
| 23 | 富崎遺跡 | 散布地 | 弥生（末期）・古墳・古代・中世・近世 | 51 | 宮ノ高B遺跡 | 散布地 | 縄文・中世？ |
| 24 | 鍛冶町遺跡 | 集落跡 | 弥生（末期）・古墳（初期）・古代（奈良）・中世・近世 | 52 | 宮ノ高A遺跡 | 散布地 | 縄文 |
| 25 | 鏡坂墳墓群 | 方形墳丘墓 | 弥生？ | 53 | 小長沢Ⅱ遺跡 | 散布地 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 26 | 渡花寺遺跡 | 寺院 | 中世（室町） | 54 | 下邑遺跡 | 散布地 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 27 | 外輪野Ⅰ遺跡 | 集落跡 | 縄文・中世・近世 | 55 | 下邑東遺跡 | 集落跡 | 古墳・古代（奈良・平安） |
| 28 | 鏡坂Ⅰ遺跡 | 集落跡 | 縄文（中期）・古代 | 56 | 鶴ヶ城跡 | 城館 | 中世 |

第１図　遺跡分布図（1/20,000）

# Ⅱ　調査の経緯と経過

## 1　調査に至る経緯

平成５年、県営は場整備事業担い手育成型（綿中南部地区）が策定された。平成６年から綿中町教育委員会では事業に先立ち、富山県埋蔵文化財センターより職員の派遣を受けて、事業予定区で分布調査を行ったところ、南部Ⅰ遺跡が発見された。その結果から、町教育委員会は今後の対応について富山農地林務事務所と事前協議を行った。

平成７年より遺跡の有無・範囲・遺存状況を把握するため、工事計画上優先すべき場所から順に試掘調査を実施した。埋蔵文化財が確認された範囲については農地サイドと協議を行い、盛土による田面調整で埋蔵文化財を保護する工法をとった。

本書で報告する調査区は、事業に伴う六ヶ用水改修工事により埋蔵文化財が掘削されるため、試掘調査の結果を基に637㎡を対象として平成11年５月から本調査を行った。調査期間は平成11年５月12日～７月28日である。

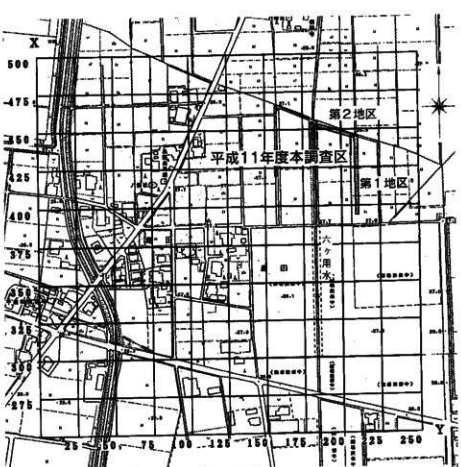
## 2　調査の方法

まずは試掘調査の結果を基に重機（バックホウ）による表土掘削を行った後、人力により包含層掘削及び遺構検出・掘削を行い、引き続き、図化・記録作業を行った。なお、井戸の平面図及び立割図は写真から図化を行った。また、全体写真は高所作業車を利用して撮影を行い、最終全体写真はラジコンヘリコプターを利用して撮影を行った。

## 3　座標軸の設定

座標軸は平成９年度本調査と同様に、国土地理院設定の第７座標系公共座標のうち、Ｘ＝68,900・Ｙ＝－2,400の点を０原点として設定した。南北軸をＸ軸とし、Ｘ＝０から北方向に進むにつれて、Ｘ座標の数値が増える。同様に、東西軸をＹ軸とし、Ｙ＝０から東方向に進むにつれて、Ｙ座標の数値が増える。１グリッドの区画は２ｍ×２ｍの単位とし、今年度の調査区の範囲はＸ＝390～455、Ｙ＝185～215となる。

調査では便宜上、南北に広がる範囲を第１地区、東西に広がる範囲を第２地区とする。



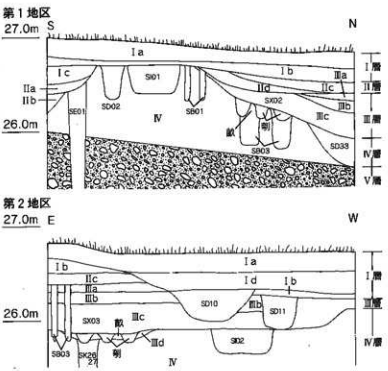

第２図　調査対象範囲と区割図（1/5,000）

# Ⅲ 調 査 の 概 要

## 1 基本層序（第３・５・６図）

基本層序は、Ⅰ層（表土～近世以降の水田耕盤耕作土）、Ⅱ層（中世以降の堆積層、中世遺物包含層）、Ⅲ層（中世遺構形成層・古代遺物包含層）、Ⅳ層（地山、遺構検出面）、Ⅴ層（地山基盤・礫層）である。

第１地区南側は、ほ場整備により包含層であるⅡ・Ⅲ層が削平されており、Ⅰ層直下にⅣ層が確認できる。Ⅳ層上面には弥生時代終末期・古墳時代前期・中世の遺構を検出した。また、南端には中世以降の氾濫堆積層が確認できる。第１地区北側・第２地区東側は、基本層位通りである。第２地区西側は、Ⅰ層直下にⅢ層が確認できる。その上面に近世以降の遺構を検出した。Ⅳ層上面には古代の遺構を検出した。




**第３図 基本層序模式図**

## 2 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代終末期の土坑１基、古墳時代前期の竪穴住居跡１棟、古代（奈良・平安時代）の竪穴住居跡３棟・掘立柱建物１棟・鍛冶遺構・畠・土坑・溝・ピット、中世の掘立柱建物２棟・井戸１基・土坑・溝・ピット、近世の溝である。以下、各時代ごと遺構ごとに記載する。

### (1) 弥生時代終末期

**ＳＫ08**（第８図） Ｘ412・Ｙ210付近に位置する。長軸125cm、深さ27cmの楕円形の土坑である。遺物は甕・長頸壺・高坏・鉢である。遺物から弥生時代終末期（月影Ⅱ式）のものと考える。

### (2) 古墳時代前期

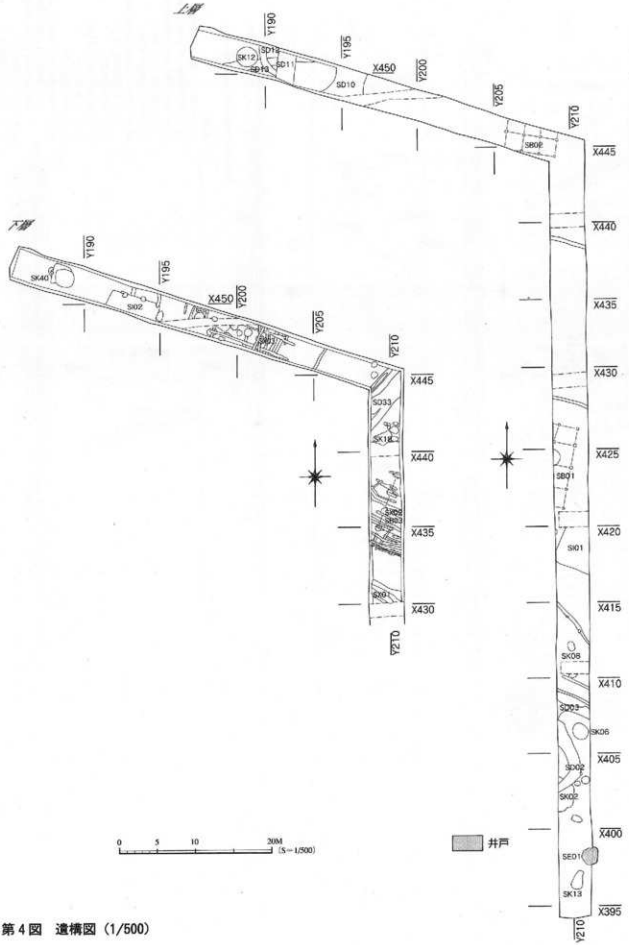
**ＳＩ01**（第８図） Ｘ417～420・Ｙ209～211付近に位置する。住居の全容は、北側は試掘調査による削平、東側は調査区外のため確認できないが、一辺約６ｍの隅丸方形の住居跡と考えた。深さ約20cm～30cmを測る。住居の軸方向はＮ－34°－Ｅである。柱穴は５箇所確認したが、詳細は判然としない。遺物は床面のほぼ全体で、良好な状態で出土した。特に住居の南西隅に集中して出土した。遺物から古墳時代前期（高畠式）に属すると考える。

**噴砂**（第５図） ＳＩ01の床面で地震による液状化噴砂〔寒川1992〕が１条確認できた。幅２cmを測り、Ｎ－54°－Ｗの方向に走っている。

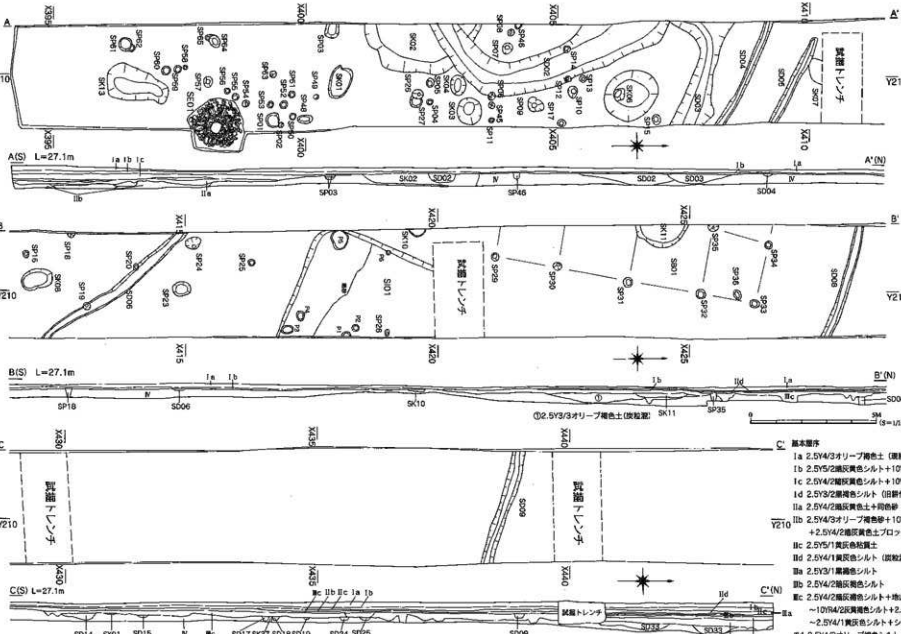
### (3) 古代

**住居跡** 住居は１棟検出した。平面形から土坑として取り上げたが、住居跡ではないかと考えたものを２棟検出した。

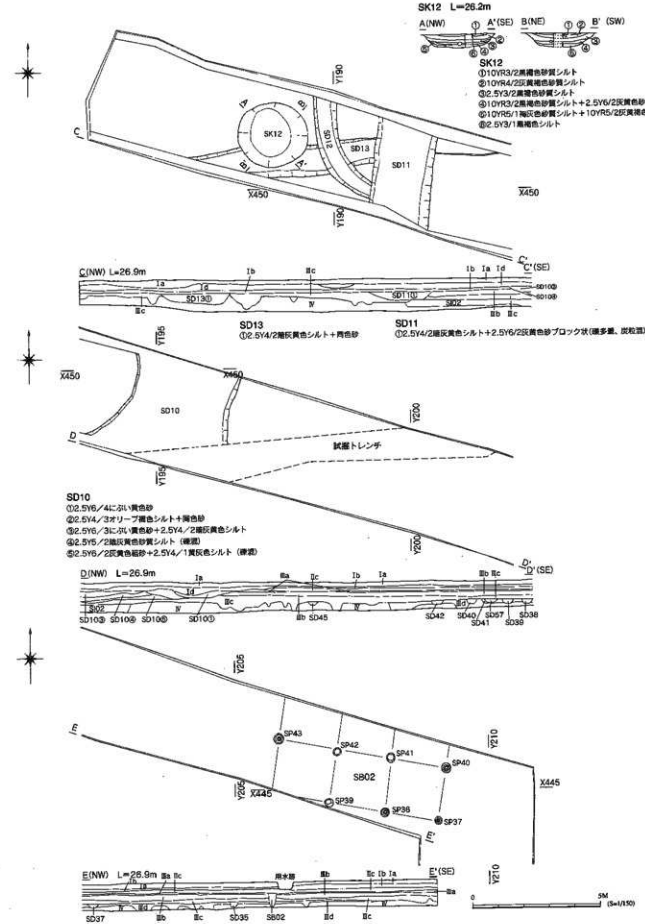
**ＳＩ02**（第９図） Ｘ448～451・Ｙ192～195付近に位置する。全体の約１／３程度が検出され、一辺が約6.7ｍの隅丸方形のプランを呈し、深さ約20cmを測る。住居の軸方向はＮ－17°－Ｅである。柱穴は４箇所確認したが、詳細は判然としない。住居跡の北東隅には60cm×40cmの焼土が観察された。遺物は須恵器の杯・杯蓋、土師器の甕・鍋・椀が出土している。遺物から８世紀中葉に属すると考える。


上層
下層
Y190
Y195
Y200
Y205
Y210
X450
X445
X440
X435
X430
X425
X420
X415
X410
X405
X400
X395
SK12
SD11
SD10
SB02
SK40
SI02
SD33
SK18
SB01
SI01
SK08
SD03
SK06
SD02
SK02
SE01
SK13
0
5
10
20M
(S=1/500)
井戸

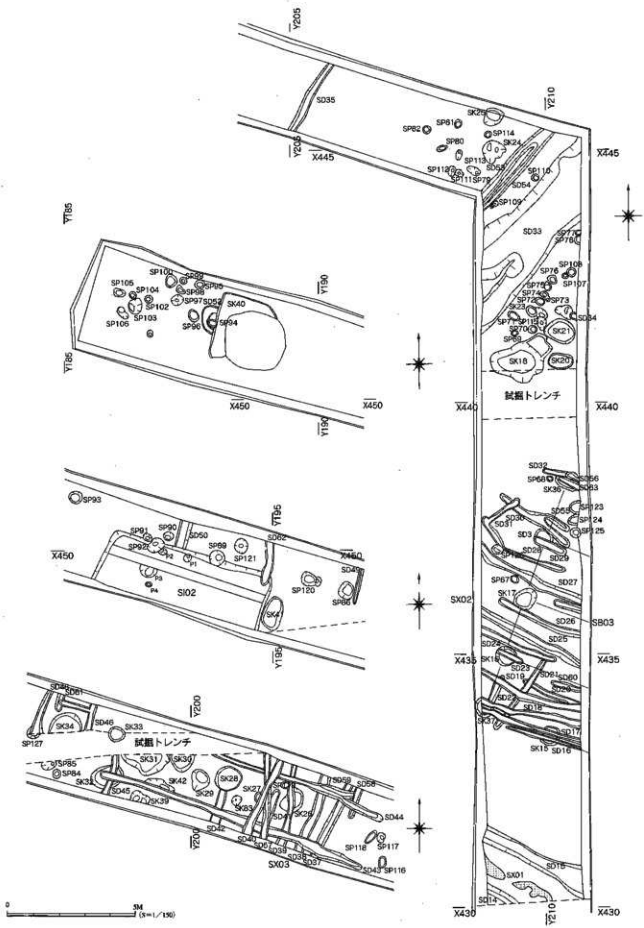
第４図　遺構図（1/500）




第５図　上層遺構平面図（1/150）及び断面図（1/150）




**第6図　上層遺構配置図(2)及び南壁断面図 (1/150)**




**第7図　下層遺構配置図（1/150）**

**ＳＫ02**（第13図）　Ｘ401～404・Ｙ209～210付近に位置する。平面形は全体の２／５程度が検出され、円形で径約4.6ｍ、深さ約40㎝を測る。遺物は須恵器・土師器、金属製品が出土している。

**ＳＫ40**（第９図）　Ｘ450～452・Ｙ188～190付近に位置する。2.7ｍ×2.3ｍの隅丸長方形のプランを呈し、深さ５㎝前後と浅い掘り込みである。後世の掘り込みであるＳＫ12・ＳＤ13に切られており、全容は確認できない。軸方向はＮ－17°－Ｅである。南西隅には径30㎝の焼土が観察された。遺物は土師器が出土しているが、実測に耐えるものはなかった。規模が小さく、ＳＩ02に近接していることから、ＳＩ02に付属する建物であると考える。

**掘立柱建物**　掘立柱建物は調査区全体で１棟検出した。各柱穴は平面形から土坑として取り上げた。

ＳＢ03（第９図）　Ｘ423～429・Ｙ209～211付近に位置する４間×１間以上の掘立柱建物である。東側が調査区外に広がり、全容は確認できない。建物は畠跡ＳＸ02に切られており、建物廃絶後、畠として利用されていたことが確認できる。間尺は、ＳＫ37－ＳＫ36間2.15ｍ＋2.40ｍ＋2.50ｍ＋2.50ｍ、ＳＫ37－ＳＫ15間2.90ｍである。柱穴規模は直径64㎝～88㎝、深さ32㎝～54㎝であり、平均は直径75.3㎝、深さ44.0㎝である。建物の軸方向はＮ－20°－Ｅである。遺物はＳＫ35・36から須恵器・土師器が出土しているが、殆ど実測に耐えるものがなかった。

**鍛冶遺構**

ＳＸ01（第10図）　Ｘ430・Ｙ210付近に位置する。遺構の軸方向はＮ－25°－Ｅである。床面に鉄滓のまとまりが検出された。遺構は西側が調査区外に延びており、詳細は判然としないが、何らかの鍛冶遺構と考える。

**畠**

**ＳＸ02**（第11図）　Ｘ423～429・Ｙ209～211付近に位置する。幅20㎝～40㎝、深さ５㎝～15㎝の刺が10㎝～１ｍの間隔をおいてほぼ平行に並んでいる。刺の方向は総体的にＮ－65°－Ｗ程度である。刺の間隔が極端に狭いことから、数回作り直しが行われたと考える。東西方向の刺にほぼ直交している刺が数条あり、畠の排水性を高めるために掘られたのではないかと考える。遺物は刺覆土等から須恵器・土師器が出土している。

**ＳＸ03**（第11図）　Ｘ446～448・Ｙ200～204付近に位置する。幅20㎝～35㎝、深さ10㎝～15㎝の刺が30㎝～60㎝の間隔をおいてほぼ平行に並んでいる。刺の方向は、総体的にＮ－20°－Ｅ程度である。東西方向に２条の刺が掘られているが、ＳＸ02と同様の理由ではないかと考える。遺物は刺覆土から須恵器・土師器が出土しているが、殆ど実測に耐えるものがなかった。

**土坑**

**ＳＫ18・20～23**（第10図）　Ｘ440～442・Ｙ210付近に位置する土坑（＋ピット）群である。ＳＫ18は最大長1.5ｍ、深さ28㎝の不整形、ＳＫ20は長軸92㎝、深さ12㎝の楕円形、ＳＫ21は直径1.1ｍ、深さ26㎝の円形、ＳＫ22は長軸60㎝、深さ34㎝の楕円形、ＳＫ23は直径38㎝、深さ36㎝の円形の土坑で、ＳＫ23がＳＫ22を切っている。

**ＳＫ24・25**（第10図）　Ｘ445・Ｙ209付近に位置する。ＳＫ24は最大長90㎝、深さ10～24㎝の不整形の土坑である。ＳＫ25は直径70㎝、深さ20㎝の円形の土坑で、最下層に炭化層が堆積している。

**ＳＫ26・27**（第11図）　Ｘ447・Ｙ202付近に位置し、畠ＳＸ02に切られている。ＳＫ26は最大長1ｍ、深さ48㎝の不整形、ＳＫ27は直径50㎝、深さ44㎝の円形の土坑である。

**ＳＫ28～33・39・42**（第11図）　Ｘ448・Ｙ198～201付近に位置する。ＳＫ28は直径約1.1ｍ、深さ12㎝の円形、ＳＫ29は最大長86㎝、深さ30㎝の不整形、ＳＫ30は直径約１ｍ、深さ50㎝の円形、ＳＫ31は最大長1.7ｍ、深さ20㎝の不整形、ＳＫ32は長軸1.3ｍ、深さ10㎝の楕円形、ＳＫ33は直径64㎝、深さ30㎝の円形、ＳＫ39は最大長80㎝、深さ14㎝～32㎝の不整形、ＳＫ42は最大長1.2ｍ、深さ18㎝の不整形の土坑である。ＳＫ32はＳＤ43・45、ＳＫ42はＳＤ43に切られている。

**ＳＫ41**（第９図）　Ｘ195・Ｙ449付近に位置する。長軸1.3ｍ、深さ20㎝の楕円形の土坑である。

**溝**

**ＳＤ14・15**（第10図）　Ｘ430～432・Ｙ209～211付近に位置し、ＳＸ01に平行して走る溝である。ＳＤ14は幅60cm以上、深さ22cm、ＳＤ15は幅52cm、深さ12cmを測る。

**ＳＤ53・54**（第10図）　Ｘ444～446・Ｙ209付近に位置し、ＳＤ33に平行して走る溝である。ＳＤ53は幅26cm、深さ12cm、ＳＤ54は幅28cm、深さ８cmを測る。調査区内で合流している。

**河川・流路**

**ＳＤ33**（第10図）　Ｘ442～445・Ｙ209～211付近に位置する旧河川・自然流路である。幅約2.7m、深さ30cmを測る。調査区内で２条の河川が合流している。覆土から多量の古代土器とともに月影Ⅱ式の土器が出土しているが、流れ込みと考えられる。出土遺物から奈良時代（８世紀中頃）には既に形成されており、平安時代（９世紀中頃）に埋没したと考えられる。埋没するまで土器廃棄場として利用されていたと考える。

**(4)　中世、近世以降**

**掘立柱建物**

**ＳＢ01**（第12図）　Ｘ421～427・Ｙ209付近に位置する４間×１間以上の掘立柱建物である。西側が調査区外に広がり、全容は確認できない。間尺は、ＳＰ29－ＳＰ33間2.50m＋2.90m＋3.00m＋2.20m、ＳＰ35－ＳＰ34間2.35m、ＳＰ32－ＳＰ35間2.70m、ＳＰ33－ＳＰ34間2.35mである。柱穴規模は直径28cm～40cm、深さ18cm～48cmであり、平均は直径34.5cm、深さ37.7cmである。建物の軸方向はＮ－10°－Ｅである。柱穴覆土から遺物の出土はなかった。

**ＳＢ02**（第12図）　Ｘ444～446・Ｙ205～209付近に位置する３間×１間以上の掘立柱建物である。北側が調査区外に広がり、全容は確認できない。間尺は、ＳＰ43－ＳＰ40間2.35m＋2.10m＋2.20m、ＳＰ39－ＳＰ37間2.20m＋2.15m、ＳＰ42－ＳＰ39間2.05m、ＳＰ41－ＳＰ38間2.20m、ＳＰ40－ＳＰ37間2.05mである。柱穴規模は直径30cm～38cm、深さ36cm～66cmであり、平均は直径34cm、深さ51.4cmである。建物の軸方向はＮ－９°－Ｅである。柱穴覆土から遺物の出土はなかった。

**井戸**

**ＳＥ01**（第13図）　Ｘ398・Ｙ211付近に位置する石組井戸で、宇野氏の区分〔宇野1989〕ではＣⅡ類石組すり鉢形井戸となる。掘り方の直径約2.1m、内径約1.0m、深さ約1.9mの円形の石組井戸である。内径は底部で約0.5mで緩やかに細くなっている。積み石は河原石を使い、右回りで積み、14段積みの井戸で、礫層を1.4m掘り込んで作られている。水溜には直径約50cm高さ6.5cmの曲物が使われている。覆土中には廃棄の際に投げ込まれた石が多量に混ざり、中世土師器・珠洲・下駄・円形板が出土している。遺物から15世紀代に属すると考える。

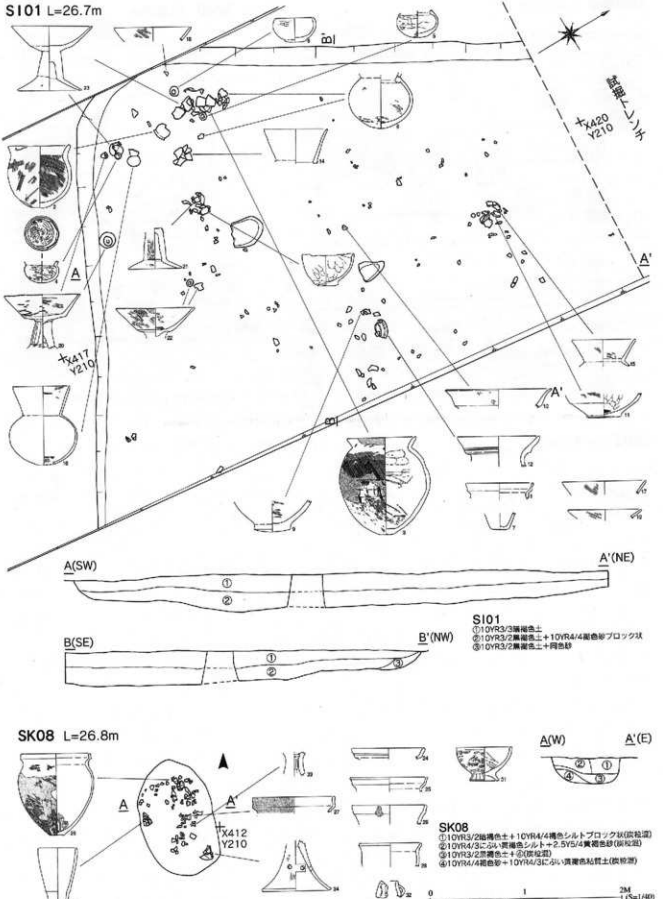
**溝**

**ＳＤ02**（第13図）　Ｘ403～407・Ｙ210付近に位置する。東側が調査区外に広がるため、全容は確認できない。溝は南西方向からＮ－54°－Ｅの主軸方向をとり、Ｘ404・Ｙ210で屈曲し、Ｎ－28°－Ｗの主軸方向をとる。規模は幅1.0m～1.8m深さ30cm～50cmを測る。溝覆土から中世土師器とともに弥生土器、古代の須恵器・土師器が出土しているが、流れ込みと考える。遺物から15世紀代に属し、建物の掘か塚状遺構の方形の周溝ではないかと考える。

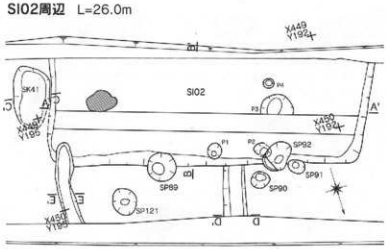
**ＳＤ10**（第６図）　Ｘ448～450・Ｙ194～196付近に位置する南北溝である。Ⅰ層直下で検出された。南壁断面から4.5mの北東方向に走る溝を約3.5mの真北に走る溝が切っている。溝覆土・出土遺物から近世以降の用水路と考える。

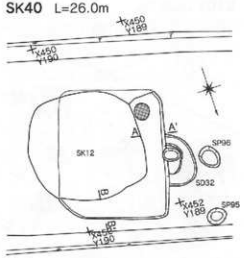
**ＳＤ11**（第６図）　Ｘ449～451・Ｙ191～192付近に位置する南北溝である。Ⅰ層直下で検出された。幅約2.4m、深さ34cmを測る。溝覆土には多量の礫が混ざっている。溝覆土・出土遺物から近世以降の用水路と考える。

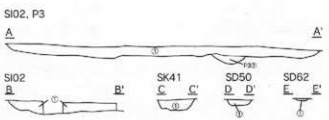
**ＳＤ13**（第６図）　Ｘ451・Ｙ187～193付近に位置する東西溝である。Ⅰ層直下で確認された。幅1.0m～1.2m、深さ30cm～45cmを測る。出土遺物から近世以降の溝である。




第８図　SI01・SK08遺物出土状況及び断面図（1/40）　※小番号は実測番号

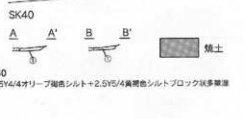



SI01
①2.5Y3/3暗オリーブ色褐色シルト＋2.5Y5/4黄褐色シルト＋褐色砂(炭粒混)

P3
①2.5Y4/3オリーブ褐色シルト＋褐色砂＋2.5Y5/4黄褐色シルト＋炭色砂(炭粒混)

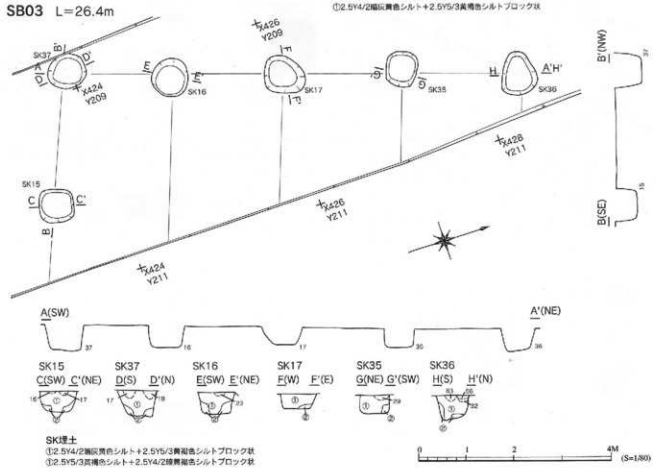



SK40
①2.5Y4/4オリーブ褐色シルト＋2.5Y5/4黄褐色シルトブロック状多量混

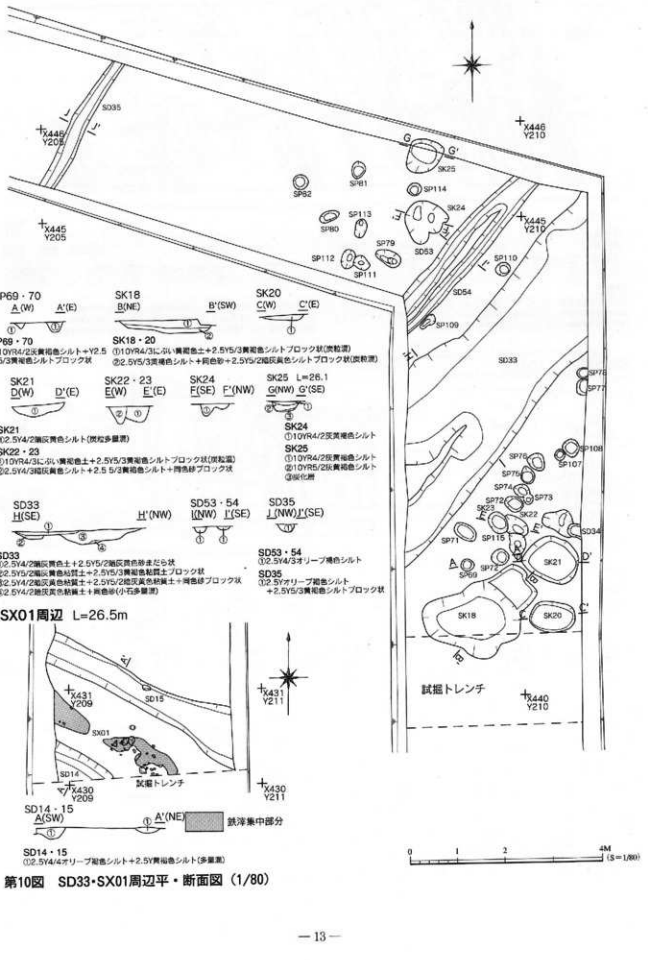
SK41
①2.5Y4/2褐灰黄色シルト＋2.5Y5/2灰黄色シルト＋2.5Y3/1黒褐色粘質土ブロック状

SD50
①10YR4/3にぶい黄褐色シルト＋2.5Y4/6オリーブ褐色シルト(炭粒混)

SD62
①2.5Y4/2褐灰黄色シルト＋2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状

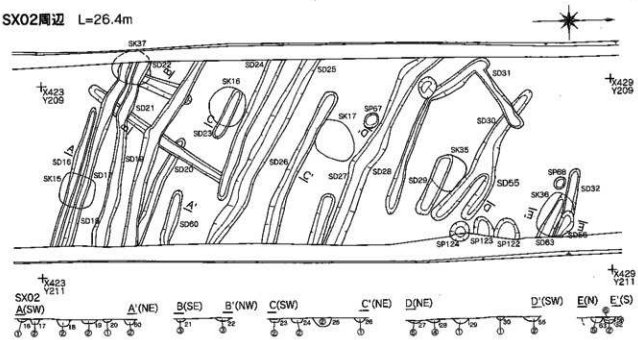



**第９図　SI02周辺及びSK40・SB03平・断面図（1/80）**　※SB03断面図の小番号はA－A'・B－B'はSK番号、C－C'～H－H'はSD番号




第10図　SD33・SX01周辺平・断面図（1/80）

## SX02周辺　L=26.4m

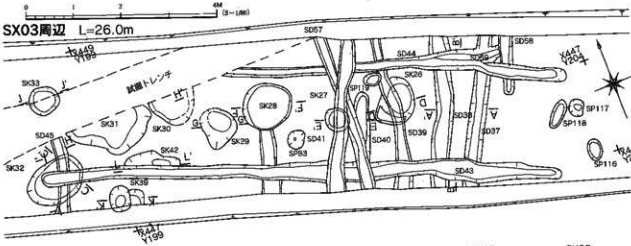


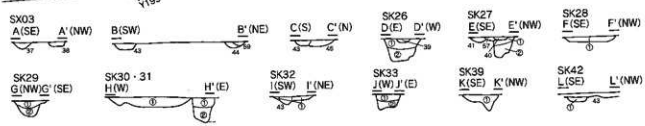

**SD埋土**

①2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状多量混
②2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルト+2.5Y3/2黒褐色シルトブロック状
③2.5Y5/3黄褐色シルト+2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック状
④2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状少量混
⑤2.5Y4/4オリーブ褐色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状少量混
⑥2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状少量混

0　1　2　4M (3～1.8m)

## SX03周辺　L=26.0m

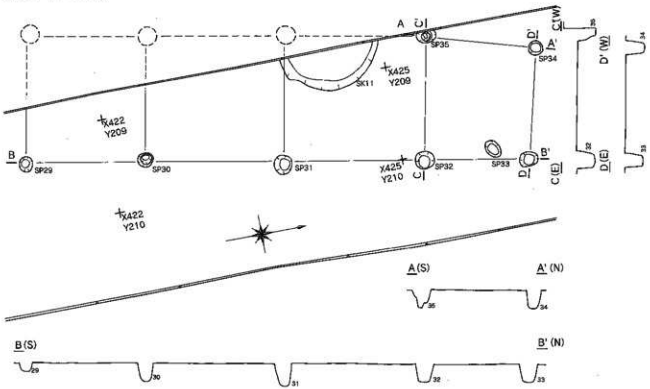


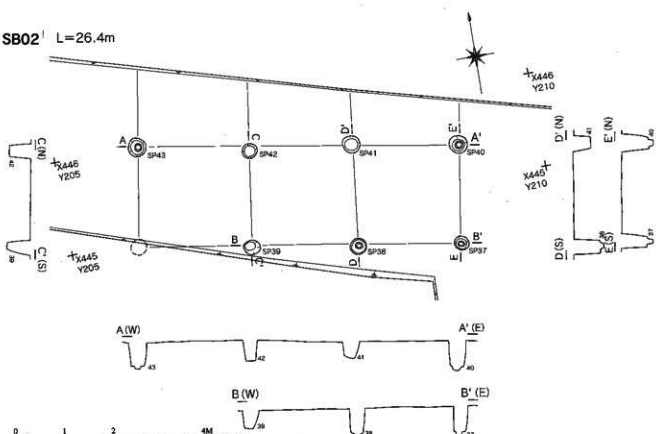

**SD37・38・39・41・45**
①2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトまだら状（炭粒混）
**SD43・44**
①2.5Y3/2黒褐色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトまだら状（炭粒混）
**SD59**
①2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
**SD57**
①2.5Y4/4オリーブ褐色シルト+2.5Y5/4黄褐色シルトまだら状多量混（炭粒混）
**SD40**
①2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+2.5Y5/4黄褐色シルトまだら状少量混（炭粒混）
**SK26・27**
①2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトまだら状多量混（炭粒混）
②2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土+2.5Y5/3黄褐色シルトまだら状少量混（炭粒混）
**SK28**
①2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+2.5Y4/4オリーブ褐色シルト+同色砂まだら状（炭粒混）
**SK29**
①2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトまだら状（炭粒混）
②2.5Y4/2暗灰黄色粘質土+2.5Y5/3黄褐色シルトまだら状（炭粒混）
**SK30**
①2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y5/4黄褐色シルト少量混（炭粒多量混）
②2.5Y4/2暗灰黄色粘質土+2.5Y5/4黄褐色シルト（炭粒多量混）
**SK31**
①2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+2.5Y3/2黒褐色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状
**SK32・39**
①2.5Y4/1黄灰色シルト+同色砂
**SK33**
①2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状多量混
②2.5Y4/1黄灰色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状多量混
**SK42**
①2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y5/4黄褐色シルトまだら状（炭粒混）

**第11図　SX02・03周辺平・断面図**　※SX02・03断面図の小番号はSD番号

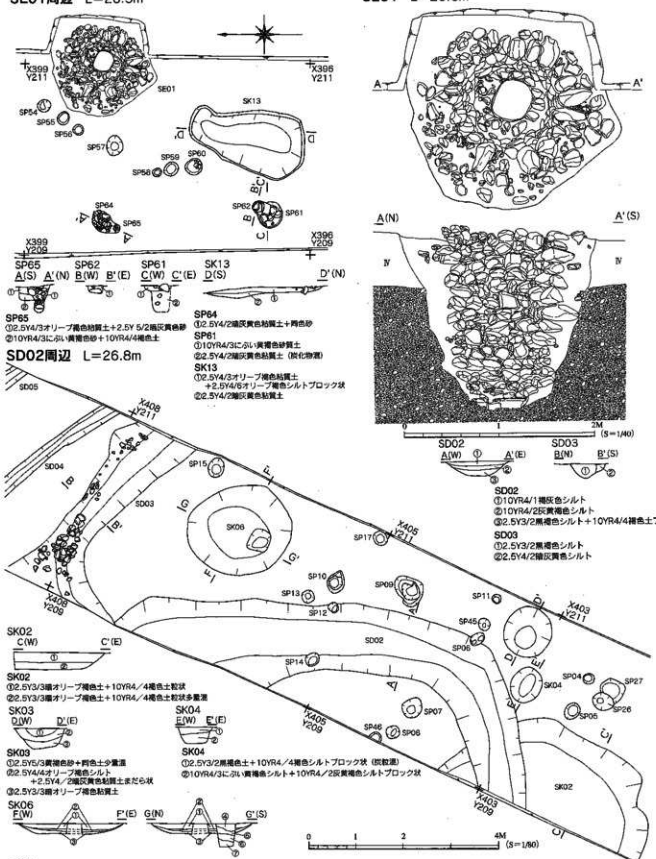
**SB01** L=26.9m




**SB02** L=26.4m




**第12図　SB01・02(1／80)**　※SB01・02断面図の小番号はSP番号




第13図　SE01・SD02周辺平・断面図(1/80)及びSE01平・断面図(1/40)

(5) 時期不明

SK03・04（第13図） X403・Y210付近に位置する。SK03は直径1m、深さ42cmの円形、SK04は長軸80cm、深さ34cmの楕円形の土坑である。

SK06（第13図） X407・Y210付近に位置する直径2.1m、深さ20cmの円形の土坑である。SK埋没後、一辺40cm、深さ50cmの方形のピットが作られている。

SK12（第6図） X451・Y189付近に位置する直径2.7m、深さ54cmの円形の土坑である。近世以降の溝SD13を切っており、近世以降の土坑である。

SK13（第13図） X397・Y210付近に位置する最大長2.5m、深さ10cm～20cmの不整形の土坑である。

SD03（第13図） X408・Y209～211に位置する東西溝である。幅0.7m～2.6m、深さ30cmを測る。西壁断面から中世の溝SD02を切っており、中世以降の溝である。溝覆土に多量の礫・小石が混ざる。

## 3．遺　物

出土遺物は、弥生時代終末期の弥生土器、古墳時代前期の土師器、古代の須恵器・土師器、土製品、金属製品、中世の土師器皿、珠洲、木製品、近世以降の陶磁器がある。以下、各時代の遺構ごとに記述する。

(1) 弥生時代の遺構

SK08（第14図24～34） 24～28は甕。24～27は有段無文口縁甕。24・25は口縁部が緩やかに斜め上方に直線的に立ち上がる。26・27は口縁部が屈曲し、直立気味に立ち上がる。24は口縁部外面に1条の沈線をもつ。26は内面底と体部外面にハケ調整を施す。26・27の外面には煤が付着する。28はくの字口縁の小型甕。29・30は壺。29は有段口縁壺の口縁部であり、外面には煤が付着する。30は台付細頸壺の口縁部。31は口縁部が内湾しながら立ち上がる台付椀形鉢。内面は口縁部付近をミガキ調整、残りをナデ調整、体部外面はハケ調整後ミガキ調整を施す。台部内外面に貼り付けのナデの跡が残る。32～34は高坏。32はコップ形の坏部であり、小さい把手が付く。33・34は高坏の脚部。33は内面にケズリ調整を施す。34は径8mmの孔が2個穿孔されており、外面はミガキ調整を施す。遺物の帰属時期は月影Ⅱ式で、3世紀前半である。

(2) 古墳時代の遺構

SI01（第14図1～23） 1～3は壺。1は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる有段無文口縁壺。2・3はくの字口縁壺で、口縁端部は丸くおさめる。2は球形の体部をもち、内外面にハケ調整を施す。口縁端部外面にヘラ傷が確認できる。3は小さな底部に最大幅を体部上半におさまる倒卵形の体部をもち、体部外面上半及び内面底部にハケ調整、体部外面下半及び体部内面にケズリ調整を施す。外面に煤が付着し、内面底部にコゲが確認できる。4・5は小型、6・14～16は丸底坩形土器で、球形またはやや扁平な球形の体部に、外方へまっすぐにのびる口縁部が付く。4は外面にミガキ調整、内面にケズリ調整を施す。5は体部外面中段にケズリ調整、上段にミガキ調整、内面にナデ調整を施す。6は内外面にミガキ調整を施す。15は口縁部内外面にハケ調整を施す。16は口縁部内面・内面底部にハケ調整を施す。7は器種不明。杯のような形態をもつ。平成9年度にも同形の赤彩土器が出土している。8は内湾する口縁部をもつ小型無頸壺で、蓋が伴うと考える。9は手づくねの鉢。10・12は有段口縁壺。12は外反する頸部に有段状口縁がつく。口縁部に2条の沈線をもつ。11・13は甕か壺の底部。11は体部外面及び内面底部にハケ調整、体部内面にタテナデ調整を施す。13は内面にハケ調整を施す。17～23は高坏で、坏部下部で強く屈曲し外に開く杯部に、裾部で屈曲し外へ直線的に開く脚部をもつ。17～19は坏部の口縁部で、外面にミガキ調整を施す。20は坏部と脚部の一部であり、内外面にミガキ調整を施す。21は脚部で、外面にミガキ調整を施す。22は坏部で、内外面にミガキ調整を施す。23は外面には摩耗が著しいがミガキ調整が確認できる。遺物の帰属時期は高杯式で、4世紀前半である。

### (3) 古代の遺構

**竪穴住居**

**ＳＩ02**（第15図35～49） 35～39は須恵器。35は須恵器の杯蓋で、口縁端部が細長く立つ。36～38は杯Ａで、底部が湾曲し体部との境が丸い。39は杯Ｂで、底部と体部の境が丸い。40～49は土師器。40は椀。41は甕の底部。42～48は甕の口縁部で、外反し端部が丸い。42・45・47は外面に、48は内面に、43は内外面にハケ調整を施す。49は鍋で、口縁断面が四角い、外面及び口縁部内面にカキ目調整を施す。遺物の帰属時期は８世紀中葉である。

**ＳＫ02**（第15図63・64） 63は須恵器の杯Ｂで、底部と体部の境が角張る。64は金属製品で、釘と考える。

**掘立柱建物**

**ＳＫ35**（第15図80） 80は須恵器の杯Ａで、口縁部の立ち上がりが緩い。

**ピット**

**ＳＰ64**（第15図50） 50は須恵器の短頸壺の体部で、焼き膨れの激しい。

**ＳＰ68**（第15図51） 51は須恵器の杯蓋で、口縁端部が断面三角形である。

**ＳＰ69**（第15図52・53） 52・53は須恵器の杯の口縁部。

**ＳＰ70**（第15図54） 54は須恵器の杯蓋で、口縁端部が丸い。

**ＳＰ71**（第15図55・56） 55は須恵器の杯蓋で、口縁端部が断面三角形である。56は土師器の甕の底部。

**ＳＰ74**（第15図57） 57は須恵器の杯の口縁部。

**ＳＰ80**（第15図58・59） 58は須恵器の杯蓋で、口縁端部が断面三角形である。59は須恵器の杯の口縁部。

**ＳＰ84**（第15図60） 60は土師器の甕の口縁部で、口縁断面が四角い。

**ＳＰ120**（第15図61） 61は須恵器の杯の口縁部。

**ＳＰ122**（第15図62） 62は土師器の甕の口縁部で、口縁断面が四角い。

**土坑**

**ＳＫ18**（第15図66～69） 66・67は須恵器の杯Ａで、底部が湾曲し体部との境が丸い。68は杯Ｂで、底部と体部の境が丸い。69は土師器の甕の底部で、外面にミガキ調整、内面にハケ調整を施す。

**ＳＫ23**（第15図70・71） 70は須恵器の杯Ａで、底部が湾曲し体部との境が丸い。71は須恵器の横瓶の口縁部で、外面に平行叩き目、内面に同心円文を施す。外面・口縁部内面に自然釉が認められる。

**ＳＫ25**（第15図72） 72は土師器の甕の底部。

**ＳＫ26**（第15図73・74） 73・74は土師器の甕。73は口縁断面が四角く、74は口縁断面が丸い。73は外面にハケ調整を施す。

**ＳＫ27**（第15図75） 75は須恵器の杯の口縁部。

**ＳＫ28**（第15図76） 76は須恵器の杯の口縁部。

**ＳＫ29**（第15図77） 77は須恵器の杯の口縁部。

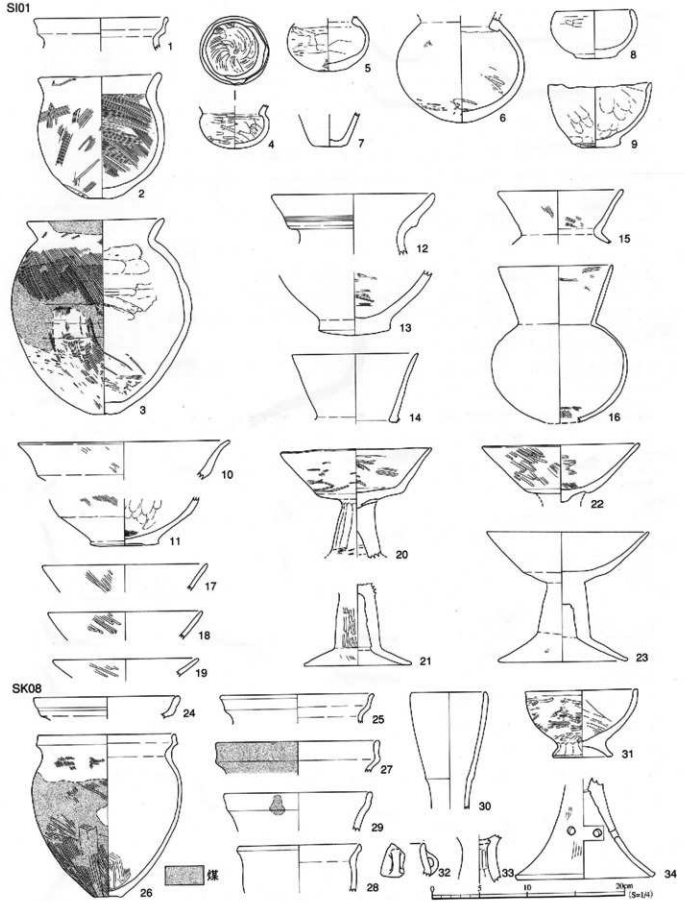
**ＳＫ31**（第15図78・79） 78は須恵器の杯Ａで、底部が湾曲し体部との境が丸い。79は須恵器の杯の口縁部。

**溝**

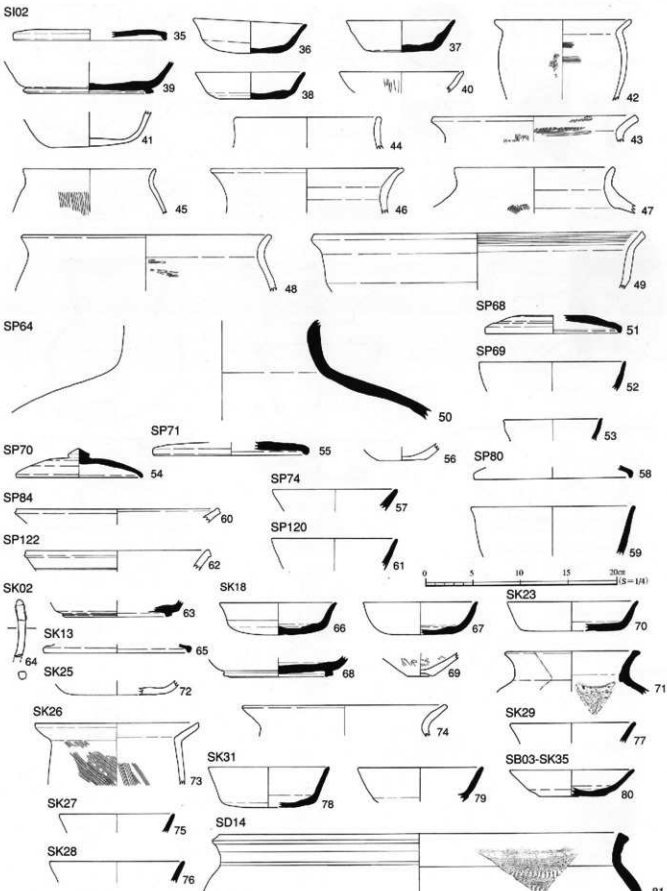
**ＳＤ14**（第15図81） 須恵器の鍋の口縁部で、体部外面に平行叩き目後カキ目調整を施す。

**旧河川・自然流路**

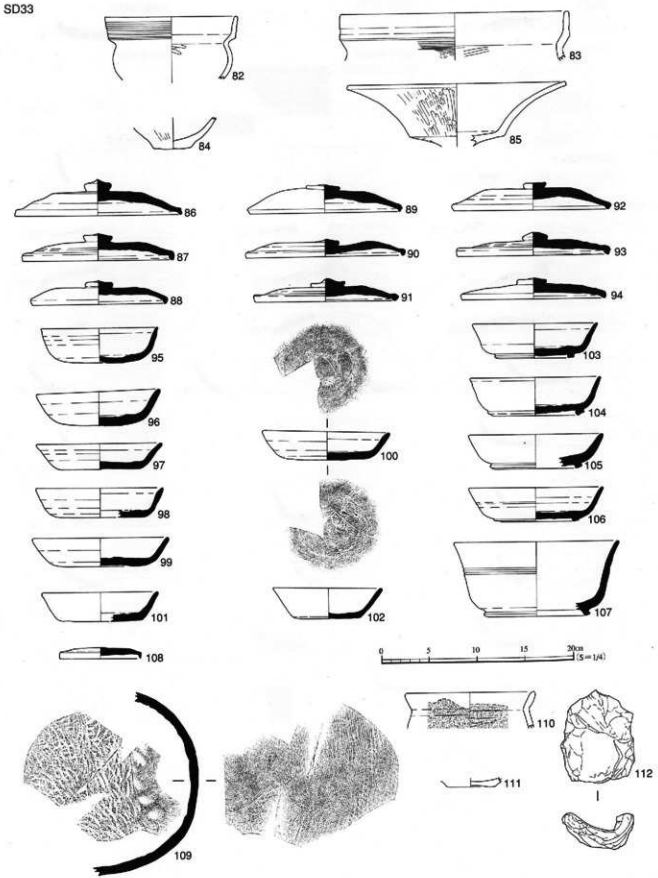
**ＳＤ33**（第16図82～112） 82～85は弥生土器。82は有段有文口縁壺。口縁部に５条の擬凹線文を施す。内面にミガキ調整を施す。83は有段無文口縁甕の口縁部。口縁部に１条の沈線をもつ。体部内外面ともハケ調整を施す。84は甕か壺の底部。体部外面にハケ調整を施す。85は高坏の杯部。内外面にミガキ調整を施す。86～109は須恵器。86～94


SI01
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
SK08
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
煤
0
5
10
30cm
(S=1/4)

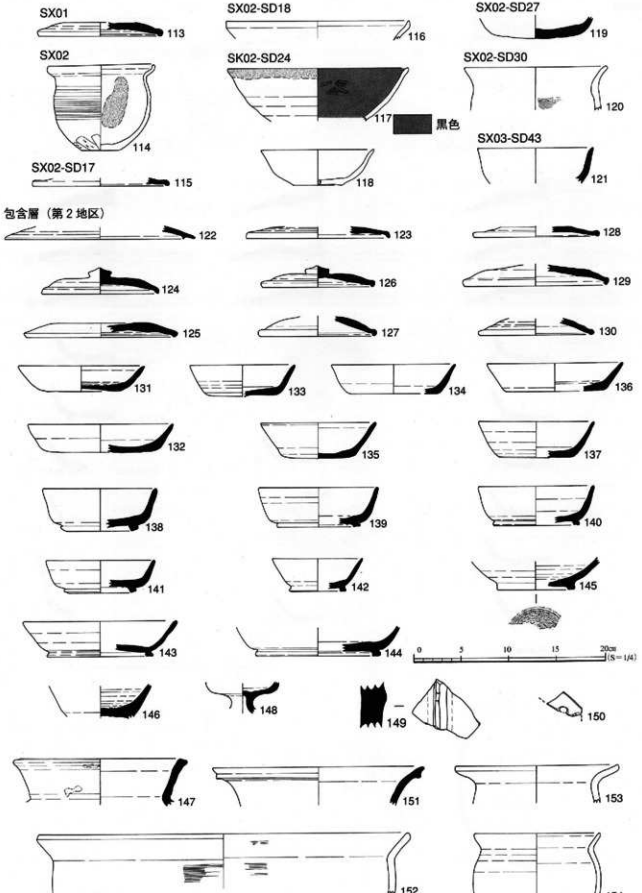
第14図　遺物実測図(1)


SI02
35
36
37
39
38
40
42
41
44
43
45
46
47
48
49
SP64
50
SP68
51
SP69
52
SP71
55
53
SP70
54
56
SP80
58
SP74
57
SP84
60
SP120
61
59
SP122
62
0 5 10 15 20cm (S=1/4)
SK02
63
SK18
66
67
SK23
70
SK13
64
65
68
69
71
SK25
72
SK26
74
SK29
73
77
SK31
78
79
SB03-SK35
80
SK27
75
SD14
SK28
76
81

第15図　遺物実測図(2)

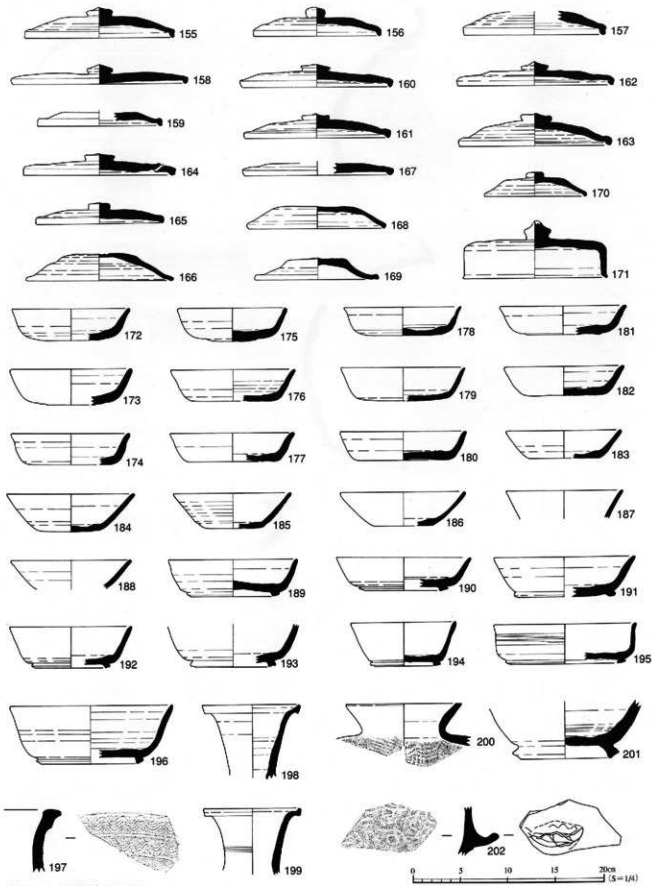

SD33
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0 5 10 15 20cm (S=1/4)
109
110
111
112

第16図　遺物実測図(3)

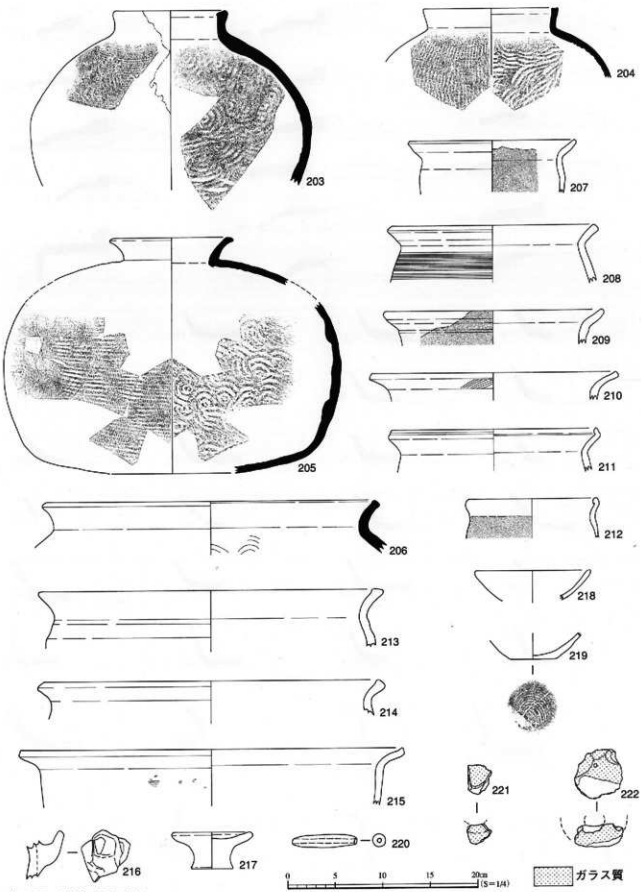

SX01
113
SX02-SD18
116
SX02-SD27
119
SX02
114
SK02-SD24
117
黒色
SX02-SD30
120
SX02-SD17
115
118
SX03-SD43
121
包含層（第２地区）
122
123
128
124
126
129
125
127
130
131
133
134
136
132
135
137
138
139
140
141
142
145
143
144
0 5 10 15 20cm (S＝1/4)
146
148
149
150
147
151
153
152
154

第17図　遺物実測図(4)

包含層（第１地区）




第18図　遺物実測図(5)


203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
0 5 10 15 20cm (S=1/4)
ガラス質

第19図　遺物実測図(6)

は杯蓋。86・87は口縁端部が細長く立つ、88～90は口縁端部が断面三角形、91～93は口縁端部を巻き込む、94は口縁端部が丸い。91は外面に自然釉が認められる。95～102は杯A。95～100は底部が湾曲し体部との境が丸い、101・102は底部が平坦で体部との境が角張る。100は見込みに「一」、外底面に「大」のヘラ記号が描かれている。103～107は杯Bで、底部と体部の境が丸い。107は器高約8㎝の大型品で、外面に2条の沈線をもつ。108は壺蓋。109は横瓶で、外面は平行叩き目後カキ目調整、内面は同心円文を施す。110・111は土師器。110は小型甕で、口縁部断面が丸い。口縁部内外面に煤が付着する。111は椀の底部で、底部に回転糸切り痕が見られる。112は鞴羽口で、外面の剥離が激しい。遺物の帰属時期は8世紀中葉から9世紀中葉である。

**鍛冶遺構**

**ＳＸ01**（第17図113）　113は須恵器の杯蓋で、口縁端部が丸い。

**畠**

**ＳＸ02**（第17図114～120）　114は土師器の小型甕で、口縁端部の内側に段をなして立つ。体部下半外面にケズリ調整を施し、体部上半外面に8条の浅い沈線をもつ。内面に煤が付着する。115はＳＤ17出土、須恵器の杯蓋で、口縁端部を巻き込む。116はＳＤ18出土、土師器の甕で、口縁端部の内側に段をなして立つ。117・118はＳＤ24出土、土師器の椀。117は内黒椀で、内面ミガキ調整を施す。口縁部外面に煤が付着する。119はＳＤ27出土、須恵器の杯Aの底部で、底部が湾曲し体部との境が丸い。120はＳＤ30出土、土師器の甕で、内面にハケ調整を施す。

**ＳＸ03**（第17図121）　121はＳＤ43出土、須恵器の杯の口縁部。

**包含層**

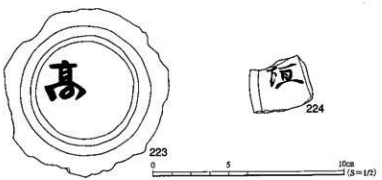
**第2地区**（第17図122～154）　122～151は須恵器。122～130は杯蓋で、122は内面にかえりをもつ、123・124は口縁端部が細長く立つ、125は口縁端部が断面三角形、126～129は口縁端部を巻き込む、130は口縁端部が丸い。131～137は杯A で、131・132は盤または皿とも呼べるもの、133～135は底部が湾曲し体部との境が丸い、136・137は底部が平坦で体部との境が角張る。131は外面に自然釉が認められる。138～145は杯Bで、138～144は底部と体部の境が丸い、145は底部に回転糸切り痕が見られる。146は壺の底部。147は短頸壺の口縁部で、外面に自然釉が認められる。148は高坏。149・150は双耳瓶の耳部。151は甕の口縁部。152～154は土師器。152は鍋で、口縁断面が四角い、体部内外面にカキ目調整を施す。153は甕、154は小型甕。

**第1地区**（第18・19・20図155～224）　X430～445の範囲で遺物が集中する。一部ＳＤ33と接合関係を持つ。155～205は須恵器。155～170は杯蓋。155～157は口縁端部が細長く立つ、158～161は口縁端部が断面三角形、162・163は口縁端部を巻き込む、164～170は口縁端部が丸い。164は器面に5㎜の穴が斜めに穿孔されている。171は壺蓋。172～186は杯A で、171～182は底部が湾曲し体部との境が丸い、183～186は底部が平坦で体部との境が角張る。187・188は杯の口縁部。189～196は杯B で、189～193は底部と体部の境が丸い、194は底部と体部の境が角張る。195は底部と体部の境が丸く、口縁部が直立するもので、体部外面にヘラ状工具による沈線が数条巡っている。196は器高約6㎝の大型品である。197は甕の口縁部で、外面に波状文が描かれている。198・199は長頸壺で、199は外面に2条の沈線をもつ。200・205は横瓶。200は外面に平行叩き目、内面に同心円文を施す。口縁部内面に自然釉が認められる。205は外面に平行叩き後カキ目調整、内面に同心円文を施す。外面に自然釉が認められ、焼き台の痕が確認できる。201は壺の底部。202は鍋の把手で、内面に同心円文を残す。203・204は短頸壺。203は外面に平行叩き目、内面に同心円文を施す。外面に自然釉が認められる。204は平行叩き目後カキ目調整、内面に同心円文を施す。206は甕で、外面に平行叩き目、内面に同心円文を施す。207～219は土師器。207～213は甕。207～210は口縁断面が四角い。207は内面に煤が付着する。208は外面にカキ目調整を施す。209は外面に煤が付着する。211は口縁端部の内側で段をなして立つ。212は口縁端部を巻き込む。外面に煤が付着する。213は外面に平行叩き目、内面に同心円文を施す。214・215は

鍋で、口縁断面が四角い。216は鍋の把手。217は皿で、棒状高台をもつ。218・219は椀。219は底部に回転糸切り痕が見られる。220は土錘で、越前氏の区分〔越前1994〕ではⅠd類となる。221・222は鞴羽口。

包含層からは墨書土器が2点出土している。223は杯B外底面に、224は杯蓋内面に書かれており、223は「高」、224は「垣」と読める。8世紀末から9世紀前葉に帰属すると考える。

包含層の遺物の帰属時期は、古いもので7世紀末に属する杯蓋（122）、新しいもので11世紀代に属する土師器皿（217）の出土はあるが、概ね8世紀中葉から9世紀後葉であると考える。




第20図　遺物実測図(7)

### (4)　中世、近世以降の遺構

**井戸**

**ＳＥ01**（第21図225～234）　225は中世土師器皿。非ロクロで、体部の括れが明瞭でなく、口縁端部が外反するをもつ。酒井氏の区分〔酒井1997〕ではＢⅡ4類となる。226～230は珠洲。226は壺の底部。227・228は甕で、吉岡氏の区分〔吉岡1989・1995〕で珠洲Ⅵ期となる。229・230はⅥ期のすり鉢。229は口縁端部に波状文をもち、2㎝幅に10条の卸目を持つ。230は2.4㎝幅に9条の卸目を持つ。231は連歯下駄で、横山氏の区分〔横山1996〕でＣⅠ1類となる。後歯はかなりすり減っている。232は連歯下駄であるが、かなりの部分が欠損している。233は円形板で、板端が片面から片面へ斜めに削ってある。234は曲物の側板。遺物の帰属時期は15世紀代である。

**溝**

**ＳＤ02**（第22図235～238）　235～237は弥生土器で、有段無文口縁甕。238は中世土師皿。非ロクロで、コースター状の器形を持つ。見込みにナデの凹みがある。酒井氏の区分でＤⅡ4類となり、15世紀代に帰属する。

**ＳＤ10**（第22図239～248）　239～246は須恵器。239～241は杯蓋で、口縁端部が断面三角形である。242は杯の口縁部。243は杯Bの底部で、底部と体部の境が丸い。244～246は甕の口縁部で、246は外面に波状文を描かれている。247は壺の底部で、内面に自然釉が認められる。248は施釉陶器の端反皿で、釉は内売、外底面は無釉。

**ＳＤ11**（第22図249～270）　249～263は須恵器。249～254は杯蓋。249～253は口縁端部が断面三角形、254は口縁端部が丸い。255は壺蓋。256・257は杯Aで、底部が湾曲し体部との境が丸い。258～260は杯の口縁部。261は杯Bの底部で、底部と体部の境が丸い。262は壺の底部で、外面に自然釉が認められる。263は甕の口縁部で、外面に波状文が描かれている。外面に自然釉が認められる。264～266は土師器。264は小型甕で、口縁部が内側で段をなして立つ。265は壺の口縁部。266は鍋で、口縁断面が四角い。267は珠洲Ⅳ期のすり鉢。268・269は越中瀬戸の削り出し高台の皿。270は施釉陶器の染付椀で、体部に円弧文を描き、全面に釉を施す。

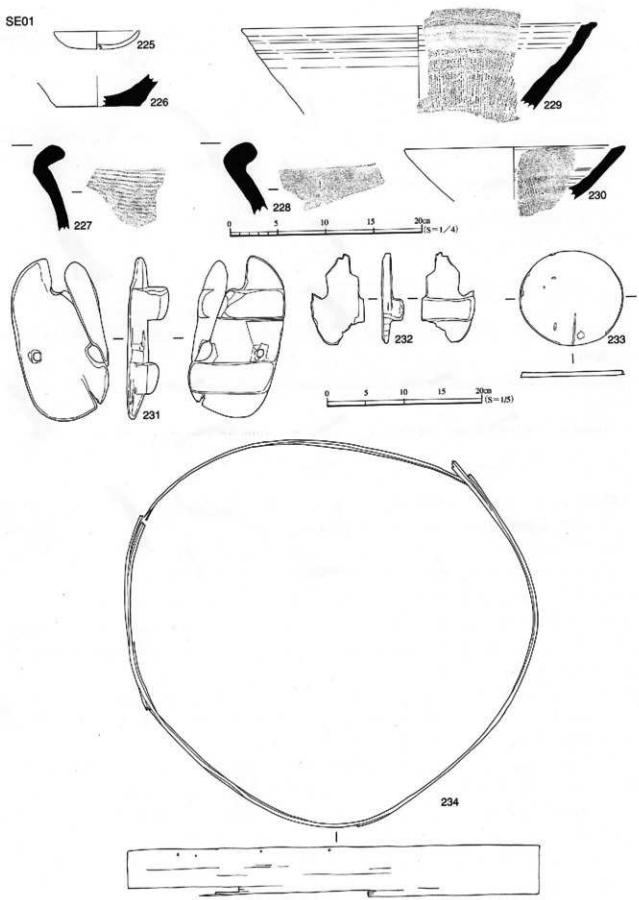
**ＳＤ13**（第22図271～277）　271～274は須恵器。271・272は杯蓋で、口縁端部を巻き込む。273・274は杯の口縁部。275は土師器の小型甕で、口縁部が内側で段をなして立つ。276は中世土師皿。非ロクロで、平らな底部から直線的に外反する体部をもつ。酒井氏の区分でＦⅠ類となり、15世紀代である。277は近世陶器である。

**包含層**（第22図278～280）

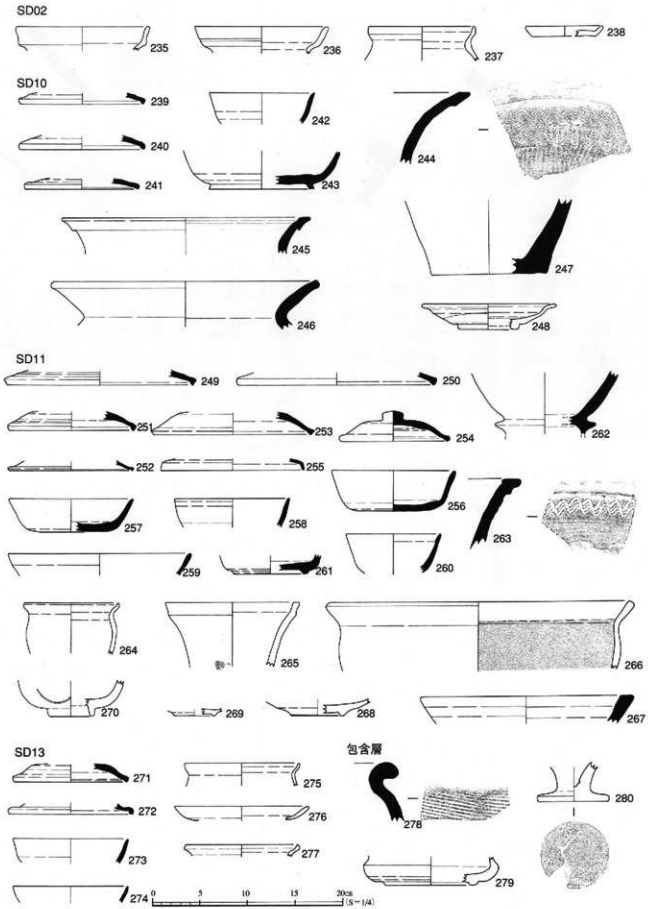
278は珠洲Ⅲ期の甕。279は越中瀬戸の火入れで、鉄釉を施す。見込みと高台付近は無釉。280は鉄釉を施した灯明受皿。底部は無釉で、回転糸切り痕が見られる。

### (5)　時期不明

**ＳＫ13**（第15図65）　65は須恵器の杯蓋で、口縁端部が断面三角形である。




**第21図　遺物実測図(8)　木製品(231～234)は1/5**


SD02
235
236
237
238
SD10
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
SD11
249
250
251
253
254
262
252
255
257
258
256
263
259
261
260
264
265
266
270
269
268
267
SD13
271
272
273
274
275
276
277
包含層
278
279
280
0
5
10
15
20cm
(S=1/4)

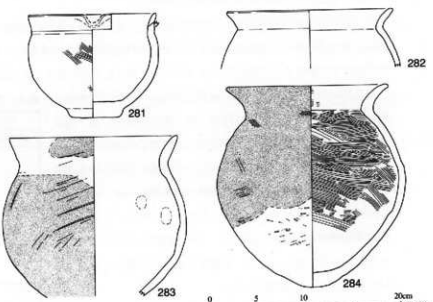
**第22図　遺物実測図(9)**

## 4．考　察

今回の調査で確認された遺構は、弥生時代終末期の土坑１基、古墳時代前期の竪穴住居跡１棟、奈良・平安時代の竪穴住居跡３棟（１棟は奈良時代）・掘立柱建物１棟・畠跡２箇所・鍛冶遺構１箇所等、中世の掘立柱建物２棟・井戸１基（室町時代）・溝等、近世以降の溝で、分布調査・試掘調査の結果を含めて本遺跡は弥生後期～古墳前期、奈良・平安時代、中世、近世の複合遺跡といえる。また、遺物として古墳時代前期の竪穴住居跡出土遺物が県内のこの時期の数少ない一括資料といえ、この成果を整理し若干の考察を加えたい。

### ＳＩ01出土土器について

第23図は平成10年度試掘調査ＣＴ43で出土したＳＩ01の土器である。281は片口の鉢または無頸壺で、厚い平底にやや内湾気味に立ち上がる体部をもち、外反する有段状の口縁部が付く。外面にハケ調整を施す。282～284はくの字口縁甕で、最大幅を体部上半におさめる倒卵形の体部をもち、強く外反する口縁部が付く。284は丸底を呈する。283は外面に粗いケズリ調整を施し、内面に指頭圧痕を残す。284は外面上半の摩耗が著しいが、ハケ調整が確認でき、外面下半にケズリ調整、内面にハケ調整を施す。283・284は外面に煤が付着する。




**第23図　試掘調査出土遺物実測図**

以上を含めたＳＩ01出土土器の組成は甕６点・壺３点・甕か壺の底部２点・丸底坩形６点・高坏７点・鉢２点・器種不明１点である。なお、これに小型器台も含まれると思われるが、今回は出土していない。甕はくの字口縁の在地型式甕で、平底または丸底に倒卵形の体部をもち、外面上半にハケ調整、下半にケズリ調整、内面にケズリ調整、内面底部にハケ調整を施すもの、外面にケズリ調整を施すもの、また、外面上半にハケ調整、下半にケズリ調整、内面にハケ調整を施すものがある。壺は強く外反する有段状口縁部をもつ。また、無頸壺もある。丸底坩形土器は球形またはやや扁平な体部に外方へまっすぐにのびる口縁部をもち、体部外面はミガキ調整を施す。法量に大小の差が見られる。高坏は畿内系高坏で、坏部は下部に稜をもち、口縁部は外へ開き、脚部は裾部で屈曲して開く。坏部内外面・脚部外面はミガキ調整を施す。

以上の特徴をもつＳＩ01出土土器は先学の土器編年に対応させると高畠式古段階（漆町９群併行期）にあたるものと考えられる。ただ、北陸西部の土器組成と比較すると、布留系甕を含まないという違いが見られる。高橋浩二氏は布留系甕を含まない土器様相をもつ地域を《羽咋型》と呼び、北陸東部の「在地型式甕を保持し続ける地域」性を指摘している〔高橋1995ａ〕。ＳＩ01出土一括土器は富山県における古墳時代前期の標準資料であるとともに婦中町のこの井田川流域が能登と共通する土器様相をもつ地域であることを示している。

※ＳＩ01出土土器について、久々忠義氏から助言・指導をいただいた。記して厚く感謝申し上げる。

# Ⅳ　ま　と　め

発掘調査の成果から南部Ⅰ遺跡の性格などについて列記し今回の調査のまとめとしたい。

1　婦中町南部Ⅰ遺跡は、婦中町熊野道・島田・高日附地内に所在し、井田川左岸標高23～32mの微高地上に立地する。遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期、奈良・平安時代、中世、近世の複合遺跡である。平成11年度本調査区は婦中町島田地内に所在する。

2　今回の調査区の造営年代は4時期に分かれる。

3　第1期は弥生時代終末期から古墳時代前期で、遺構は弥生時代終末期の土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡である。特に、竪穴住居跡ＳＩ01出土一括土器は富山県当該期の標準的資料である。また、今回の調査で集落存続期間が4世紀前半まで続くことが分かり、ほぼ同時期に築造されたと考えられる国指定史跡王塚古墳との関係が示唆される。

4　第2期は奈良・平安時代で、遺構は奈良時代の竪穴住居跡1棟、奈良・平安時代の竪穴住居跡2棟・掘立柱建物1棟・畠跡2箇所・緑冶遺構1箇所などである。遺構は自然流路ＳＤ33の両岸に形成されているが、表2のように遺構の主軸方向はほぼ一定方向であり、婦中町のこの地域では条里制に基づいて土地が区画されていたのではないかと考える。しかし、これは今回の調査面積637㎡（幅4m）という狭い範囲での検討であることを断っておきたい。今後、本遺跡での周辺の調査が進み、資料が増加を待って再検討したい。

遺物は8世紀中葉から9世紀後葉に帰属する。また、8世紀末から9世紀前葉の墨書土器が出土しており、本遺跡が一般集落とは異なり、在地の領主階層集落の可能性を示唆するが、今後の資料の増加に期待したい。

表2　主軸方向一覧表

| 時代 | 遺構 | 主軸方向 |
|---|---|---|
| 古墳時代 | ＳＩ01 | Ｎ－34°－Ｅ |
| 古代 | ＳＩ02 | Ｎ－17°－Ｅ |
| | ＳＫ40 | Ｎ－17°－Ｅ |
| | ＳＸ01 | Ｎ－25°－Ｅ<br>（Ｎ－65°－Ｗ） |
| | ＳＸ02 | Ｎ－25°－Ｅ<br>（Ｎ－65°－Ｗ） |
| | ＳＸ03 | Ｎ－20°－Ｅ |
| | ＳＢ03 | Ｎ－20°－Ｅ |
| 中世 | ＳＢ01 | Ｎ－10°－Ｅ |
| | ＳＢ02 | Ｎ－9°－Ｅ |

5　第3期は中世で、遺構は室町時代の掘立柱建物2棟・溝1条・井戸1基である。それぞれの遺構がかなり離れて点在しており、集落が広範囲に広がっていると考える。

6　第4期は近世以降で、遺構は調査区の北西部で用水路ではないかと考える数条の溝が見つかっているだけである。このことから近世以降、現在と同様に水田として利用されていたのではないかと考える。

## 参考文献


ア　宇野隆夫1989「10　井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社

大野究1999「惣領遺跡出土資料」『平成10年度水見市立博物館年報－第17号－』水見市立博物館

小田木治太郎1989「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ　石川考古学研究会々誌第32号』石川考古学研究会

カ　片岡英子1999『六治古塚試掘調査現地説明会資料』婦中町教育委員会

上市町教育委員会1998『富山県上市町　砂林開北遺跡発掘調査概報』

久々忠義ほか1982『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』上市町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター

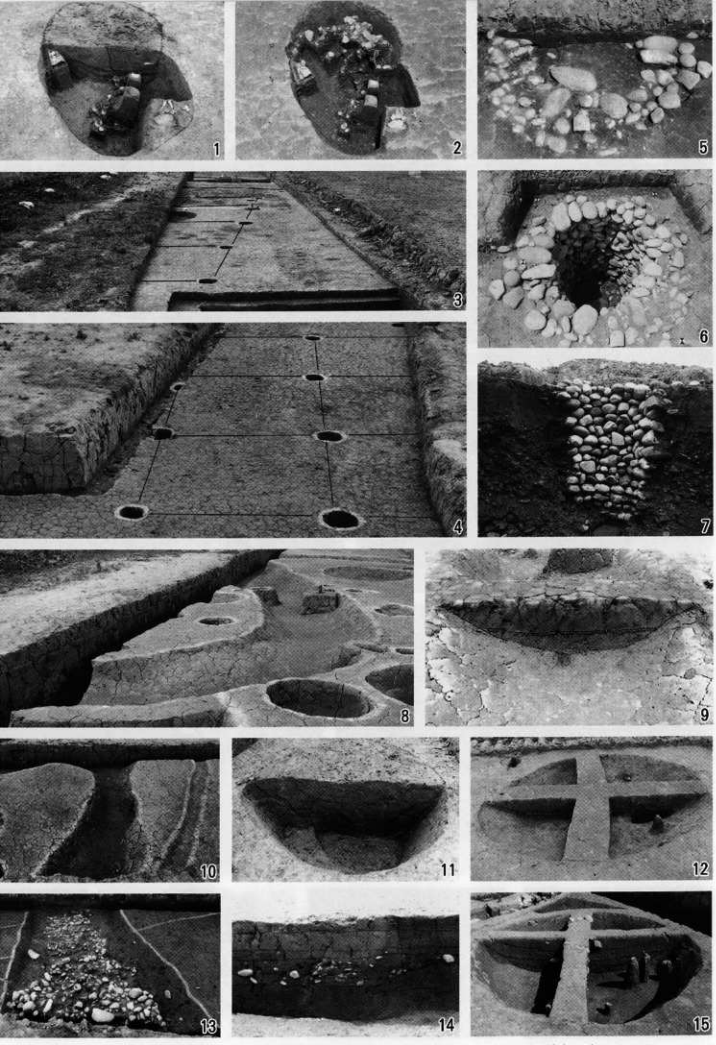
久々忠義ほか1984『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編－』上市町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター

久々忠義1990「婦中町富崎四隅突出型墳丘墓」『埋文とやま　第32号』富山県埋蔵文化財センター
久々忠義1999「古墳出現期の土器について」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会
サ　酒井重洋1997「中世土師器の分類について－清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡から－」『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
タ　高橋浩二1995ａ「北陸における古墳出現期の社会構造－土器の計量的分析と古墳から－」『考古学雑誌　第80巻第３号』日本考古学会
高橋浩二1995ｂ「越中における古墳出現期の様相」『大境　第17号』富山考古学会
田嶋明人1986「Ⅳ考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－　２土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人1996「月影式土器」「北陸の３世紀中葉～４世紀初頭の土器（第１様式）」「北陸の４世紀の土器（第２様式）」『日本土器辞典』雄山閣
富山県教育委員会1985『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（３）　南太閤山Ⅰ遺跡』
富山県埋蔵文化財センター1994『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告書（４）　吉倉Ｂ遺跡』
富山県埋蔵文化財センター1996『富山県富山市　任海宮田遺跡発掘調査報告書』
富山県埋蔵文化財センター1997『富山県富山市　任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
富山県埋蔵文化財センター1998『富山県富山市　任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
富山市教育委員会1974『富山市境野新遺跡発掘調査報告書－古墳時代住居跡－』
ハ　婦中町教育委員会1984『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告書』
婦中町教育委員会1993『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』
婦中町教育委員会1993『富山県婦中町　小倉中稲遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会1994『富山県婦中町　小倉中稲遺跡発掘調査報告（２）』
婦中町教育委員会1995『千坊山遺跡（１）』
婦中町教育委員会1995『富山県婦中町　中名Ⅱ遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会1997『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』
婦中町教育委員会1998『富山県婦中町　南部Ⅰ遺跡発掘調査報告』
マ　三島道子1998「第Ⅴ章　考察　１五社遺跡出土の古墳時代土器について」『五社遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
ヤ　谷内尾晋司1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学　石川考古学研究会々誌第26号』石川考古学研究会
八尾町教育委員会1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書１』
横山和美1996「第Ⅱ章　２出土遺物　Ｄ．木製品」『梅原護摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
吉岡康暢1989『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉田裕子1998「中名Ⅰ・Ⅴ遺跡出土の墨書土器について」『富山考古学研究－紀要創刊号－』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

図版1　航空写真(1/10,000)　　昭和22年　米軍撮影

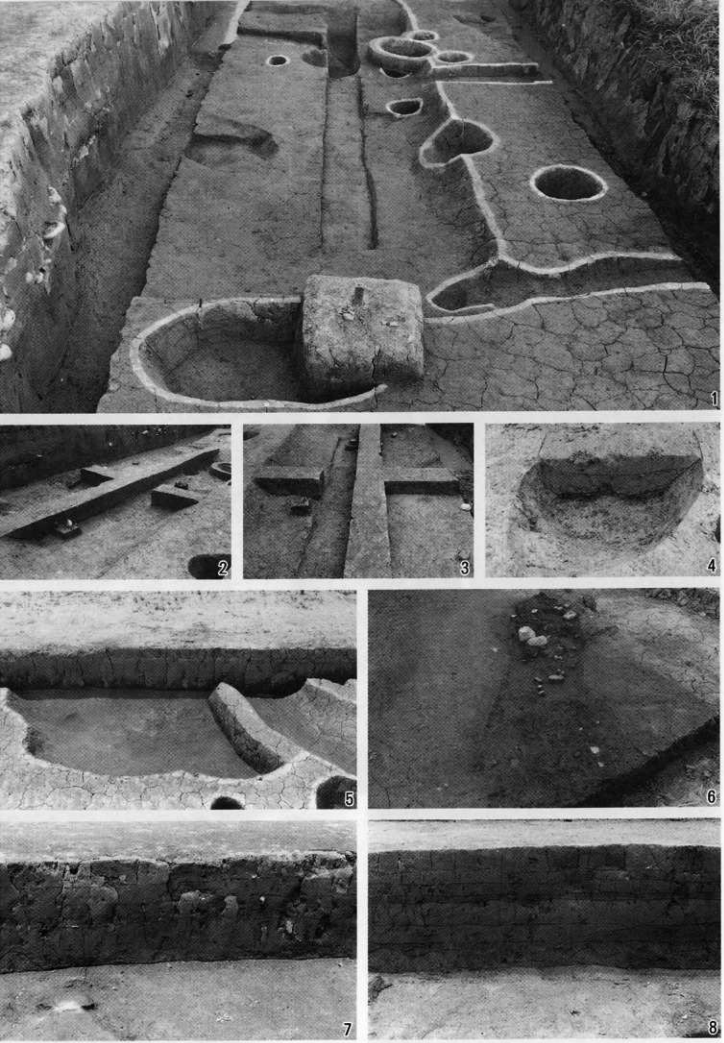
図版2　1．第1地区上層検出遺構(南から)　2．第2地区上層検出遺構(西から)
3．表土剥き風景　4．包含層掘削風景　5．遺構掘削風景

図版３　１．SI01(南西から)　２．SI01南北セク(南東から)　３．SI01東西セク(北東から)
４．SI01遺物出土状況(南から)　５．SI01南西遺物出土状況　６～８．SI01遺物出土状況近景
９．SI01内横砂検出状況(北西から)

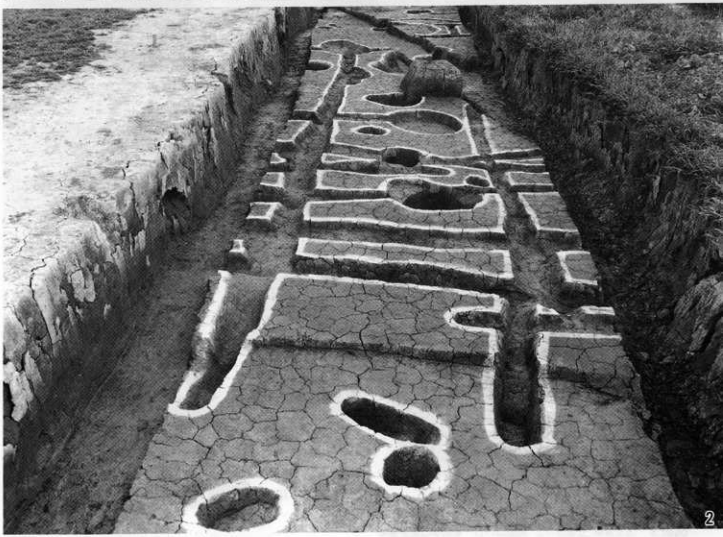


図版4　1．SK08セクション(南から)　2．SK08遺物出土状況(南から)　3．SB01(南から)　4．SB02(南東から)
5～7．SE01(西から)　8．SD02(南東から)　9．SD02セクション(南から)　10．SD03(東から)　11．SK03(南から)
12．SK061(西から)　13．SD10(南から)　14．SD10南壁セクション　15．SK12(北西から)

図版５　１．第１地区下層検出遺構(北から)　２．第２地区下層検出遺構(北西から)
３．SD33セクション(北東から)　４．SD33セクション(北東から)

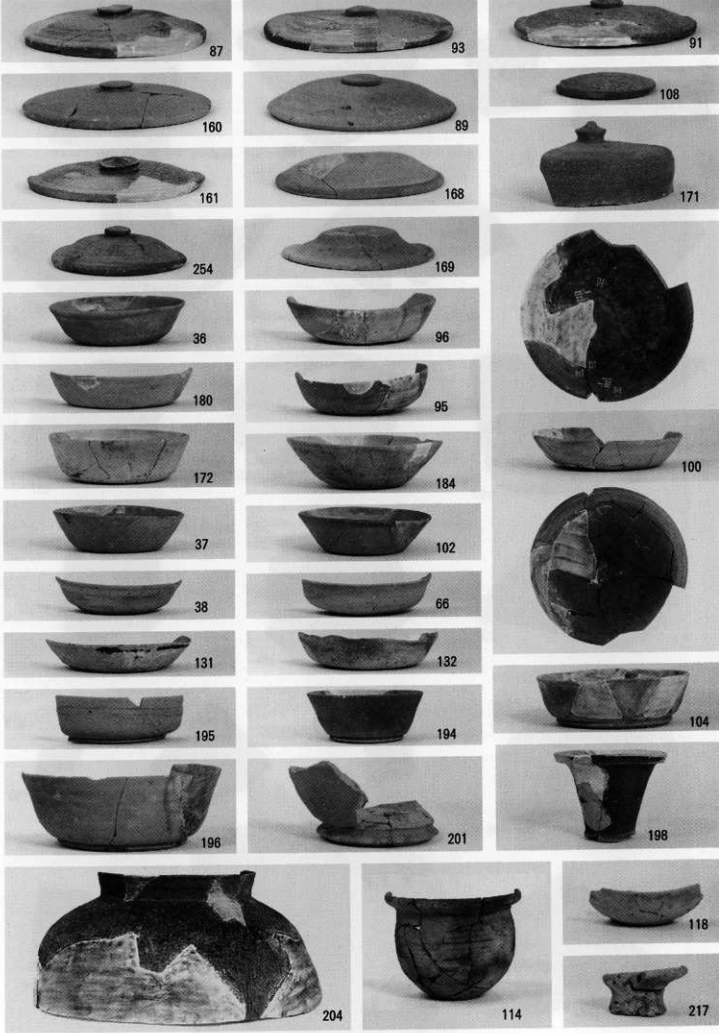


図版6　1．SI02(南東から)　2．SI02南西セクション　3．SI02南北セクション　4．SK25(南から)
5．SK02(西から)　6．SX01(北西から)　7．第1地区基本層位X428付近(東から)
8．第2地区基本層位Y407付近(北から)




図版7　1．SX02・SB03(南から)　2．SX03(南東から)

図版 8　出土遺物（立面は1/3、俯瞰は1/2）　※数字は実測番号




図版 9　出土遺物(1/3)　※数字は実測番号